

終末の日の祝福とさばき 2 - 4章

2-4章の預言はイザヤの青年時代の預言であることに、注解者たちは一致する。それにもかかわらず、イザヤが終末預言をしていることに注目したい。2-4章は、主題に続く、5つの部分に分けられる。

a 主題 (2:1)

1節 アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて示された先見のことば。

<示された先見のことば>は、文字通りには「見たことば」である。 1:1 注解。

b 主の家の山の幻(2:2-5)

2-5節は、ミカ書 4:1-5 と同じである。イザヤとミカは同時代の預言者であったが、イザヤがミカ書から引用したとか、ミカがイザヤ書から引用したと考えるよりも、当時存在した預言者の共同体の伝承から、両者が引用したと考えるほうが良い(本注解書旧約4「預言書について」p45)。イザヤは、共同体の伝承を、「自分の見たことば」として、若いころの預言のトップに置いた。当時の預言者たちは、北王国のヤロブアムと南王国のウジヤの時代の平和と繁栄が、見せ掛けで一時的なものであることを見抜いていたので、終わりの日の近いことを予測しつつ、この伝承を歌い上げていたと思われる。イザヤも同じ伝承の精神に生き、聖霊の導きにより、「自分が神によって示されたことば」として受け取った。

この部分をミカ書 4:1-5 と比較すると、4つの相違点がある。第一は、この伝承の初めは接続詞ワウであるが、ミカ書のほうは3章の終わりと内容的に連続しているので、「しかし」と訳して 4:1 を読み始めると良い。イザヤ書のほうは、前の部分と連続していないので、別の所から引用したという感じを強く受ける。しかし、接続詞ワウが前と連続することなく使用される例もある(ルツ 1:1、エズ 1:1)。第二の違いは、「堅く立ち」が、イザヤ書では「終わりの日」の次に置かれて強調されていることである。第三の違いは、「国」(Ⓐゴイ)と「民」(Ⓐアーム)が入れ替わっていることである。更に、イザヤ書 2:4 の「国々」が、ミカ書 4:3 では「多くの国々の民」となっており、続くイザヤ書の「多くの国々の民」が、ミカ書では「遠く離れた強い国々」となっている。第四の違いは、末尾の文章の違いである(イザ 2:5 とミカ 4:4-5)。以上の相違点から言えることは、預言者たちが一字一語に縛られていなかったことである。それにもかかわらず、同じ原資料を引用していることは明らかである。たぶん彼らは、暗記しており、自分の語ろうとする文脈に自由に挿入したことが、末尾の結論が違うことから推測される。

2節 終わりの日に、

主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、

**丘々よりもそびえ立ち、
すべての国々がそこに流れて来る。**

<終わりの日>(**ア**ハリース・ハッヤーミーム)は、「この時の流れの終わりの頃に」ということで、旧約神学の重要な用語である(創49:1、民24:14、申4:30、31:29、エレ48:47,49:39、エゼ38:16、ダニ10:14、ホセ3:5、ミカ4:1)。

<日>(**ヨ**ーム)は、単なる24時間の一日を指すのではない。もともと日の暑さを意味したが、夜に対して「日」と呼ばれ、やみに対して「光のある間」とも考えられる。ユダヤ人には、ギリシャ的なクロノスとしての静止の延長としての時の概念はなかった(ポーマン『ヘブライ人とギリシャ人の思惟』p206-253)。時は、意味内容と動作によって把握された。複数**ヤ**ーミームが実際にどれくらいの長さになると、問題ではなかった。それゆえ、「しばらく」である場合も(創27:44)、「数日」である場合も(創8:10、12、ネヘ1:4)、「一年」である場合も(民9:22、サム29:3)もっと長い年月を指す場合もあった(創43:9、44:32、申4:40、5:29、6:24、サム2:32、35、エレ31:36等)。ここで定冠詞がつけられているが、イザヤが具体的に何を考えていたかはわからない。

<終わり>(**ア**ハリース)は、文字通りには「後」である。ユダヤ人にとって、過去は**ケ**デム(前)であり、未来は「後」であった。現代人はいつも未来を前に見て、過去を後のものとして忘れ去ろうとするが、ユダヤ人の意識は正反対であった(ポーマン、前掲書、p243-5)。しかし後に続く未来も重要である。なぜなら、そこに来るものが重要であるから。預言者たちやイザヤにとって、それがいつ来るということは問題でなく、その内容と、それが来るという確実性と、それに対する姿勢(終末に生きる態度)が重要であった。

<主の家の山>は、もちろんシオンであり、エルサレムである。エルサレムは海拔790メートルにある高台で、山麓からの高さとしては、ヘルモン山(2815メートル)はもちろん、タボル山(588メートル)、カルメル山(546メートル)にも劣るから、それが、<山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち>ということは、たとえである。

3節 多くの民が来て言う。

「さあ、主の山、ヤコブの家に上ろう。

主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。

私たちはその小道を歩もう。」

それは、シオンからみおしえが出、

エルサレムから主のことばが出るからだ。

前節の内容の説明。イスラエルの優越性は、霊的なリーダーシップである。預言者たちは、イスラエルのことだけを考える排他的ナショナリストではなかった。すべての国々が、

<ヤコブの神>を自分たちの神と認めてエルサレムにやってくる終末の時代が来ることを、確信していた。それは、エルサレム自体の高さ、広さ、雄大さによるのではなく、霊的リーダーシップ、すなわち、神の<ことば>と<おしえ>の中心地であるからである。万国の民は、神のおしえを、単なる知的な真理として受け取るのではなく、自分たちの歩むべき真理の<道>として受け取る、しかも<主>ご自身がみことばを通して<教えてください>と、人格的関係のうちにとらえているのである。

**4節 主は国々の間をさばき、
多くの国々の民に、判決を下す。
彼らはその剣を鋤に、
その槍をかまに打ち直し、
国は国に向かって剣を上げず、
二度と戦いのことを習わない。**

ここに描かれる世界平和の情景は、主ご自身のさばきによって保証されている。それは、核抑止力とか大国エゴの押し付けによってやっと保証されている平和ではない。神のおしえが人々の心に自発的に受け取られる結果生じる平和である。戦争は起こらないだけでなく、<二度と戦いのことを習わない>。このような平和についての預言は、他の箇所にも見られる(9 : 4-7、11 : 6-10、19 : 23-25、54 : 13、エレ3 : 18、ゼカ9 : 10、14 : 16)。

**5節 来たれ。ヤコブの家よ。
私たちも主の光に歩もう。**

呼びかけは、1 : 18 の呼びかけと同じ形で、「さあ」でよい。終末の主の家の山の情景に見とれていた会衆は、「さあ」という呼びかけにより、未来から現在へと、引き戻される。そして、実際の行動へと駆り立てられる。<ヤコブの家よ>。あなたがたは、このような未来図を見て、恥ずかしく思わないのか。あなたがたの責任は、世界的な見地から見ても重要ではないか。<私たちも主の光に歩もう>。<も>は原文にはない。「さあ、今、私たちは悔い改めて、主の光に歩もうではないか」と解釈するのがよい。<主の光> 60 : 1、3、19、20。

c 主の日、世の誉れの碎かれる時(2:6-22)

2 : 6-8 には、終末の時代の主の家の山の幻(2-4)と対照的な、現実のイスラエルの状態が描かれる。これは、ウジヤ王の時代(前 791-740 年)を指しているのかもしれない。6 節は、接続詞^へキーで始まる(「まことに」)。それは、前節の「主の光に歩もう」という呼びかけ

とは、まったく正反対の現実の姿を示しているからである。しかし、そのことによって、6節以下に示される罪の叱責と主のさばきの宣言が、究極的には回心への可能性と関係していることに気づかされる。どれほど罪が深く、罪のさばきが決定的のように見えても、預言者がそれを預言し、それが書き記された最終の目的は、悔い改めと救いである(テモテ 3 : 15,16)。

6節 まことに、あなたは、
あなたの民、ヤコブの家を捨てられた。
彼らがペリシテ人のように
東方からの者、ト者で満ち、
外国人の子らであふれているからだ。

<まことに、あなたは、あなたの民、ヤコブの家を捨てられた>。その理由は、主の厳しさによるのではなく、イスラエルの罪による。ここで接続詞[△]キーが再び用いられ、理由が示される(<・・・からだ>)。<東方からのト者>と、西方からのペリシテ人をはじめとする<外国人の子ら>が、イスラエルにあふれていると言われる。<ト者>(△オーネーン)は、動詞分詞形であるが、もともと「おおう」という意味で、人の目に隠れたことを示す人、すなわち、魔術師、ト者の意。この箇所は、原文から訳すのに困難な箇所であるが、要するに、東西からの外国人によってイスラエルの国が満たされ、しかも<ト者>が多いということで、レビ記 19 : 26、申命記 18 : 20 の律法違反である。

7節 その国は金や銀で満ち、その財宝は限りなく、
その国は馬で満ち、その戦車も限りない。

ここに描かれている繁栄の状態は、ウジヤ王の時代の繁栄(歴代 26 : 5-15)を指しているのかもしれない。富みすぎることに、世の力の象徴である<馬>に頼ることは律法の禁じる場所であった(申 17 : 16,17)。<馬>と<戦車>を大量に輸入したのはソロモンである(列 4 : 26,28、10 : 29 等)。これについては考古学的な証拠がある(C・F・ファイファー『統一王国』p69)。イザヤはここで、ソロモン時代からのことを考えていたかもしれない。

8節 その国は偽りの神々で満ち、
彼らは、
自分の手で造った物、
指で造った物を拜んでいる。

世の権勢に頼るところに、ここに示されているような偶像礼拝が必ず侵入する(列 11 :

2-10)。イザヤの偶像礼拝に関する預言(2 : 18,20、10 : 10,11、19 : 13、31 : 7、40 : 18-20、42 : 17、44 : 9-17 等)も、彼の神学思想を理解する重要な鍵の一つで、44 章に詳述される。

**9節 こうして人はかがめられ、人間は低くされた。
彼らをお赦しにならないように。**

8節と9節の間には、接続詞ワウ(<こうして>)があるが、実際には分けて考えた方がよい。<かがめられ><低くされた>は完了形であるが、イザヤは実際にさばきの目を目の前に見ているわけではないから、強調を示す完了形で、世の権力と富に頼る者が主によって必ず低くされるといふ、一般論を述べていると考えるべきである。6-8節のイスラエル人も、<人>と<人間>という用語によって一般化されている。<かがめられる>は、2 : 11,17 に繰り返される(5 : 15、60 : 14)。<低くされる>も、2 : 11,12,17 に繰り返される(5 : 15,15、10 : 33、40 : 4)。

<彼らをお赦しにならないように>は難解なことばである。ここで用いられている否定辞 \square アルは、普通、未完了形と結びついて願望を表すから、新改訳どおりの訳になる。とすれば、若いイザヤは、同胞の罪に満ちた姿に憤りを覚えて、このような祈りをしたのかもしれない(ネヘ 4 : 5)。しかし、 \square アルは、詩文の時、否定辞 \square ローと同じ意味に用いられる場合がある。そうであれば、「あなたは彼らをお赦しになりません」と未来の主のさばきを預言していることになる。

**10節 岩の間に入り、
ちりの中に身を隠せ。
主の恐るべき御顔を避け、
そのご威光の輝きを避けて。**

前述のように、「かがめられる」「低くされる」という対句が、9,11,17節に繰り返されて、9-22節の詩文の節を形成している。9節の展開が10-22節に見られると考えてよい。<岩>は、ユダの地に多く、敵が攻めて来た時、人々はよく岩間に身を隠した。<ちり>は、ごみのちりではなく、ここでは土の意(ヨブ 19 : 25、39 : 14、イザ 47 : 1)。主のさばきの日に、人が神の御前から<身を隠す>ことはできない(創 3 : 8-10、詩 139 篇)。それゆえ、ここには皮肉の意味がこめられているのかもしれない。<主の恐るべき御顔>は旧約聖書中この2章にのみ用いられている。<そのご威光の輝き>も、旧約聖書中この2章にのみ見られる(35 : 2)。イザヤは、世俗の富と権力と偶像礼拝の一切が打ち砕かれる日を見たとき、独自の表現を使用した。

11節 その日には、高ぶる者の目も低くされ、

**高慢な者もかがめられ、
主おひとりだけが高められる。**

<主おひとりだけが高められる>という表現も、2章にだけある(33:5)。若年でありながら、イザヤは、この時期に、神の超越性、至高性についての、特別の啓示を受けていたのかもしれない。

**12節 まことに、万軍の主の日は、
すべておごり高ぶる者、すべて誇る者に
襲いかかり、これを低くする。**

<万軍の主の日>。2節の「終わりの日」の「日」は、複数で、かなりの期間を指すのに対し、ここの<日>は、単数で、短い時を指している。2章全体の構造から見れば、「終わりの日」という終末的な時間の流れの中に、<万軍の主>という一定の時または瞬間的なときがある、と考えるのが自然であろう。しかし、「終わりの日」の来る前に<万軍の主の日>が突然やってきて、人々の高ぶりがさばかれると考えていたかもしれない。

**13節 高くそびえるレバノンのすべての杉の木と、
バシヤンのすべての檜の木、**

13節以下では、イスラエルの人々が誇りとし頼りとしていたものが、次々と取り去られる。<レバノンのすべての杉の木>は、レバノンスギと呼ばれるもので、樹高24-30メートルに達し、枝は木の高さほどに水平状に広がる。その栄光(イザ35:2,60:13)、丈の高さ(列19:23)、その見事さ(ゼカ11:1,2)などによって、ほめたたえられた。また、建築材として尊ばれ、ダビデ、ソロモンが、神殿と宮殿建設に用いた。

<バシヤンのすべての檜の木>も、壮麗さで有名である。<バシヤン>は、北はヘルモン山、西はガリラヤ湖と上ヨルダン川、南はヤルムク川、東はジェベル・ハウランの死火山によって境界づけられる広大な地域を含む高原地帯で、その北部には、標高1300メートルの山岳に茂る雄大な檜の木の森がある。<檜の木>は、船材にも用いられた(エゼ27:6)。

**14節 すべての高い山々と、すべてのそびえる峰々、
15節 すべてのそそり立つやぐらと、堅固な城壁、**

<すべてのそそり立つやぐらと、堅固な城壁>は、歴代誌第二、26:6,9,10,15に記されているウジヤの業績が具体的に考えられているかもしれない。

**16節 タルシシュのすべての船、
すべての慕わしい船に襲いかかる。**

<タルシシュ>は、すでに創世記 10 : 4 に出て来る古くからの地中海西部に位置する良港である。ソロモンとヨシャパテは、アカバ湾のエツヨン・ゲベルを基地とする船隊を作って、これをタルシシュの船団と呼んだ。当時、スエズ運河はなかったので、紅海を貿易圏とする船団に、タルシシュにあやかってそのような名をつけたのか、実際に喜望峰を回ったのかはわからない(列 9 : 26、10 : 22、22 : 48、歴 20 : 36、エゼ 27 : 25)。<慕わしい船>とは、貿易用の商業船に対比される観光用の船のことである。

**17節 その日には、高ぶる者はかがめられ、
高慢な者は低くされ、
主おひとりだけが高められる。**

11 節の繰り返しであるが、それは詩形の節、強調、また思想が展開する柱になっている。

18節 偽りの神々は消えうせる。

<偽りの神々は消えうせる>は、8 節の「偽りの神々で満ち」と対比される。ここでは短い一言で言い切っているが、それだけに、偶像そのものは対比せず、問題とするに足りないとするイザヤの偶像観が、すでに現れている。

**19節 主が立ち上がり、地をおののかせるとき、
人々は主の恐るべき御顔を避け、
ご威光の輝きを避けて、
岩のほら穴や、土の穴に入る。**

10 節の繰り返しである。<地をおののかせるとき>は、単なる地震なのか(アモ 1 : 1、ゼカ 14 : 5)、天変地異(イザ 13 : 13、24 : 1、19、20、詩 18 : 7、ナホ 1 : 5、八ガ 2 : 6)を考えていたのかは不明である。<岩のほら穴> 士 6 : 2、サム 13 : 6。<土>(Ⓐアーファール)は、普通「ちり」と訳されることばで、10 節でもそう訳されているが、ここでは明らかに<土>の意。<穴>(Ⓐメヒッラー)は、旧約聖書中ここにしか用いられていない。

**20節 その日、人は、拝むために造った
銀の偽りの神々と金の偽りの神々を、**

もぐらや、こうもりに投げやる。

<銀の偽りの神々と金の偽りの神々>。8、18 節から一歩進めて、その材質に言及する。人々の最も尊重する金銀が、<もぐらや、こうもり>に投げやられると言う。<こうもり>は旧約聖書中3回用いられている(レビ11:19、申14:18、イザ2:20)。「もぐら」(ハパルパーラー)は、旧約聖書中ここだけに用いられている。これは、レビ記11:29の「もぐら」(ホーレド)とは別のものである。ホーレドはもぐらに似ているが、それより大きい「もぐらねずみ」と呼ばれるもので、体長25-28センチくらい、土中に生活する夜行性の動物で、エルサレムの城壁のあたりにも多く住んでいる。一方、ハパルパーラーは「もぐらもち」で、日本産のもぐらに似ている。体長15センチくらいで、土中に穴を掘って生活する。現在、もぐらもちは聖地には見られないが、イザヤの時代にはたくさんいたのであろうか。旧約聖書中ここしか用いられていないということは、それほど人々の意識に浮かんでこない動物であったということである。しかしイザヤは、詩文の思想の表現のためにこれを巧みに使用した。10節の「岩の間」と「ちりの中」から、19節の「岩のほら穴」と「土の穴」に進み、更にそこに住む<もぐら>と<こうもり>に転じる時、聴衆は新鮮な詩的感銘を受ける。高価な金銀製の偶像も、もぐらやこうもりにとっては、猫に小判であった。

**21節 主が立ち上がり、地をおののかせるとき、
人々は主の恐るべき御顔を避け、
ご威光の輝きを避けて、
岩の割れ目、巖の裂け目に入る。**

19節の繰り返しであるが、ここでも、<岩の割れ目><巖の裂け目>という用語によって新鮮味を保たせている。

**22節 鼻で息をする人間をたよりにするな。
そんな者に、何の値うちがあろうか。**

結論である。命令形をとっているが、対象は、10節の命令形の対象とは違う。10-21節の終末的なさばきの情景を見せられた人々に対する警告をこめた悔い改めの勧めである。人々は、金銀や権力に頼っているようであるが、その背後にある真の動機は、人間信頼にほかならない。人々は、神を離れて偶像を拝んでいるが、その背後にある真の宗教性は、人間崇拜に他ならない。イザヤは、若くしてすでにこの真実を見抜いている。<鼻で息をする人間をたよりにするな>に代わる勧めは、「唯一の神にのみ頼れ」である。しかし、神は、目に見えるお方ではなく、神の啓示すなわち「主の光」においてのみ明らかにされるお方

である。そこで、5節と22節は表裏の関係にある。

d さばきとしての無政府状態(3:1-15)

第4の段落は、思想的には単純である。しかし、実際の状況でこのような政治的発言をすることは、生命の危険を冒すことにもなりかねない。

3章

1節 まことに、見よ、万軍の主、主は、
エルサレムとユダから、
ささえとたよりを除かれる。
すべて頼みのパン、すべて頼みの水、

この段落が前章と続いていることは、接続詞[△]キーで始まっていることから知られる(<まことに>)。内容的にも、2:22の結論が、政治の混乱、腐敗、無政府状態の預言によって展開されていると言える。しかし実際には、2章の内容とかなり違った状況について述べられているので、編集の際につなぎあわされたのかも知れない。ここに用いられている神の名称は、<万軍の主>(1:9 注解)と、<主>([△]アードーン)である。[△]アードーンに定冠詞[△]ハがつけられている理由は、神の唯一性と至高性を示すためである。[△]アードーンは、いろいろな意味での「主」を表すが、神について用いられる場合、全世界の保持者であり支配者であるお方を表す。

<エルサレムとユダ>は、神の選ばれた聖なる場所、神のことばの中心地、恩寵あふれる場所である(1:1,2:3)。そこから<ささえとたより>が取り除かれる。共に動詞[△]シャーアン(支える、より頼む)に由来する名詞形で、男性形と女性形だけの違いである。それによって、イザヤは、人間の拠り頼む一切のものを表現しようとした。また、それは、<すべて頼みのパン、すべて頼みの水>で表現される人間存在の基本的な必要物であることを示している。3:1は、ヘブル語で16語あるが、その半分の8つは、アルファベット文字メームで始まっており、詩的な美しさとバランスを保っている。

2節 勇士と戦士、さばきつかさと預言者、
占い師と長老、

具体的に社会の指導者と必要な人物が、2,3節にリストアップされる。最初にあげられるのは、軍人である。まことの神に信頼することをしなくなったイスラエルは、結局、軍事を第一の頼りとせざるを得ない。<勇士>は、<戦士>の中でも特に勇ましい人物(サム17:10、詩33:16)。<さばきつかさ>と<預言者>が取り去られると、社会秩序は保たれず、

神の御旨は聞かれない。<占い師>は、イスラエルでは厳しく禁じられていた(申 18:10,14)。彼らも取り去られるということは、精神的支柱がすべて奪われることを示している(ミカ 3:6,7)。<長老>は、王国成立以前においても以後においても、実際の政治と裁判を担当していた(申 19:12、22:15,17,18、列 12:6 等)。

3節 50人隊の長と高官、議官と賢い細工人、 巧みにまじないをかける者。

<50人隊の長>は、軍隊の指導者を指す(サム 8:12、列 1:9)。<高官>は、権威を持ち尊敬を受けるべき人物を指す(イザ 9:15、列 5:1、ナアマンは尊敬されていた)。<議官>は、王などに助言する人物。<賢い細工人>は、協会訳のように「巧みな魔術師」と考える注解者も多いが、ヤングは新改訳と同じく「賢い細工人」と考える(列 24:14 以下、エレ 24:1、29:2)。<巧みにまじないをかける者>は、魔術の文句を彫った金銀や宝石細工のまじないの道具を上手に扱う人。

4節 わたしは、若い者たちを彼らのつかさとし、 きまぐれ者に彼らを治めさせる。

さばきの他の一面は、頼りにならない人物を指導者とすることによってあらわされる(列 12:8-15、伝 10:16)。

5節 民はおのおの、仲間同士で相しいたげ、 若い者は年寄りに向かって高ぶり、 身分の低いものは高貴な者に向かって高ぶる。

政治が、無為無能の人物によって機能を停止するとき、社会共同体の秩序も乱れる。

6節 そのとき、人が父の家で、 自分の兄弟をとらえて言う。 「あなたは着る物を持っている。 私たちの首領になってくれ。 この乱れた世を、あなたの手で治めてくれ。」

7節 その日、彼は声を張り上げて言う。 「私は医者にはなれない。 私の家にはパンもなく、着る物もない。 私を民の首領にはしてくれるな。」

無政府状態だけでなく、国がまったく荒廃した状態が前提とされている。「人々が全く少なくなり、空腹のため無気力になったので、家族の間だけで首領を選ぶことができるようになった」(デリッチ)。普通なら、だれでも権力の座につくことを願い、また権力争いも起こるところであるが、国が荒廃すると、人の指導者になるよりも、自分の生活を守ることに精一杯である。

8 節 これはエルサレムがつかずき、
ユダが倒れたからであり、
彼らの舌と行いとが主にそむき、
主のご威光に逆らったからである。

9 節 彼らの顔つきが、
そのことを表している。
彼らは罪を、ソドムのように現して、
隠そうともしなかった。
ああ、彼らにわざわざあれ。
彼らは悪の報いを受けるからだ。

接続詞[△]キー(<これは・・・からである>)で始まり、無政府状態(1-7)の理由を述べる。<舌>は「ことば」の詩的表現。神を賛美すべき器官で神を呪うのである。<主のご威光>は直訳「彼の栄光の目」。イザヤは「栄光」ということばを好んで用いたが、「栄光の目」という表現はここだけである。旧約聖書全体にも見出されない。これは、神学的な意味よりも、9 節にあるように<彼らの顔>が全く厚顔無恥で、神がそのご栄光を現されたのに、その見ておられる目の前で、平気で<罪を・・・現して、隠そうともしない>事実を強調するためである。<ソドム>は、1:9,10を受けている。

10 節 義人は幸いだと言え。
彼らは、その行いの実を食べる。

11 節 悪者にはわざわざあれ。
わざわざが彼らにふりかかり、
その手の報いがふりかかる。

1:19,20 と同じく、義人と悪者、信仰者と不信仰者が対照されている。<義人>についてここでは何も詳しい定義が下されていない。さばきの預言のちょうど真ん中に、このような義人についての預言を挿入するのが、イザヤの常套手段である。それによって、さばきの預言が最終的には悔い改めを目標としていることが明らかにされる。

12節 わが民よ。幼子が彼をしいたげ、
女たちが彼を治める。
わが民よ。あなたの指導者は迷わす者、
あなたの歩む道をかき乱す。

神は、<わが民よ>と二度呼びかけて、終末のさばきの日の近いことを想起させられる。<彼>とは民を指し、集合名詞としての単数形である。<幼子>は乳離れしたばかりの幼子で、4節の「若い者」から更に年齢は下っている。<女たちが彼を治める>。ヤングは<女たち>を女のように弱い指導者と解釈するが、女性も政治界に活躍するアメリカの状況が心理的影響を及ぼしたのかもしれない。比喩的解釈を排除せよと叫んだルターも、同じように解釈している。しかしここでは、女のような指導者でなく、女の指導者と言われている。イゼベル(列21:5-15,25)や、アタルヤ(列11:1-3)の例を見るまでもなく、女が民を治めることは、幼子が民を治めるのと同じように不幸であり不適當と考えられていた。

13節 主は論争するために立ち上がり、
民をさばくために立つ。
14節 主は民の長老たちや、民のつかさたちと、
さばきの座に入る。
「あなたがたは、ぶどう畑を荒れすたらせ、
貧しい者からかすめた物を、
あなたがたの家に置いている。
15節 なぜ、あなたがたは、わが民を砕き、
貧しい者の顔をすりつぶすのか。
万軍の神、主の御告げ」

1-15節の結論である。神は不信仰のイスラエルをさばき、その証拠として、無政府状態に陥れられるが、最後には、ご自身が、さばきのために<立ち上が>られる。論争形式は、1:18-20と関係している。しかしここでは、論争のために招くだけでなく、論争するために<立ち上がって>おられる。また、ここでは一方的な罪の暴露だけである。さばかれるのは、まず国の指導者である。1-15節を通じて、「王」が全然出てこないのは、すでに王が存在しない亡国の状態を想定しているのであろう。

e 女の虚栄へのさばき(3:16-4:1)

2-4章の第五の段落は、3:16-4:1である。現在の章節の区切りが、内容から見た区切

りと食い違っている好例である。イザヤは、主のさばきが下る時、その対象が偶像そのものや金銀そのものでなく、それに頼る人間、しかも人間の高ぶりであることを見抜いていた。人間の高ぶりが最もよく示されているのは、女の虚栄に満ちた生活である。イザヤが事物に対して鋭い目と正確な観察力を有していたことは、この段落に見られる女の装身具のリストだけでなく、例えば、28：23-29の農業技術の紹介、44：9-17の職人の働きぶりの描写などからも知られる。18-23節は、詩でないように見えるが、原文の一語一語は、韻と形に工夫を凝らしてあり、預言を聞くものに詩的な感銘を与えている。

16節 主は仰せられた。

「シオンの娘たちは高ぶり、
首を伸ばし、色目を使って歩き、
足に鈴を鳴らしながら小またで歩いている。」
それゆえ、

**17節 主はシオンの娘たちの頭の頂を
かさぶただけにし、
主はその額をむき出しにされる。**

3：16-4：1の段落の主題で、「女の虚栄へのさばき」と言うことができる。<高ぶる>は、2：11,17の「高ぶる者」と同じ語源である。人間の高ぶりは、実際の生活では、過度の性的欲望とぜいたくな生活態度に表れる。<色目を使って>は、旧約聖書中ここにしか用いられていない。<小またで歩いている>も旧約聖書中ここだけである。ルターは「ゆっくりと、しゃなりしゃなり」と歩くと訳している。シオンの娘が歩く目的は、速度や目的地にあるのではなく、男を物色することと、虚栄の装身具のデモンストレーションにあった。古代オリエント世界では、慎みが美德とされていたのに、ここでは正反対である。『コーラン』にも次のように言われている。「女の信仰者にも言うておやり。慎み深く目を下げて、陰部は大事にしまっておき、おもてに出ている所は仕方がないが、そのほかの美しいところは人に見せぬよう」「うっかり地団駄踏んだりして、隠していた飾りに気づかれたりしないよう」（「光の部」31）。

<それゆえ>(16)は17節の初めに持って行くべきである。カルヴァンは、シオンの娘たちが優しい忠告や戒めなどのことばに聞こうとしないので、「それゆえ」主は実際のさばきの主題をとられると解釈する。17節は、主のさばきによって、虚栄は砕かれ、女にとって致命的な病の姿にさせられるとの預言である。

18節 その日、主はもろもろの飾り 足飾り、髪の大輪飾り、三日月形の飾り物、

18-23節には、主が取り去られる装身具がリスト・アップされている。<足飾り>は、旧

約聖書中、ここと箴言 7 : 22(足かせ)に出て来るだけである。動詞形でもこの 3 : 16 の「鈴を鳴らしながら」に出て来るだけである。足飾りのチリチリ、カチャカチャという音は、性欲を刺激した。<髪の輪飾り>も旧約聖書中ここにしか用いられない。原語は「編む」に由来し、編目の髪ネットを意味するという説がある(ゲゼニウス)。一方、ウガリット語との比較から、原意は「太陽」に由来し、日の形の髪飾りと考える説がある(ヤング)。後者の意味にとれば、次の<三日月形の飾り物>と対になる(士 8 : 21,26)。

19 節 耳輪、腕輪、パール、

<耳輪>は、ここと士師記 8 : 26 に用いられるだけである。<腕輪>もここにのみ用いられている。原意は「輪」を意味するだけであるから、「首輪」であるかもしれない。<パール>は、二枚の薄いパールで、一枚は頭から目の上まで、もう一枚は目の下まで垂れ下がり、いつも顔をおおっている。

20 節 頭飾り、くるぶしの鎖、飾り帯、香の入れ物、お守り札、

<頭飾り>は複数であるが、61:3,10 に単数で用いられている(出 39:28、エゼ 24:17,23)。<くるぶしの鎖>は、小またで歩くように工夫したもの。<飾り帯>は特に花嫁が着けた(49 : 18、エレ 2 : 32)。<香の入れ物>は、「袋」(雅 1 : 13)の場合と、「つぼ」(ルカ 7 : 37)の場合がある。<お守り札>は 3 節の「まじない」と同じことばで、必ずしも<札>であるとは限らない。魔術の文句を彫ったまじないの小道具である。

21 節 指輪、鼻輪、

<指輪><鼻輪>と女の虚栄の飾りには果てしがない。

22 節 礼服、羽織、外套、財布、

衣服が紹介される。<礼服>は、普段着ない特別のドレス。<羽織>は、いわゆるチューニックのことで、腰まで来る婦人用上着。<外套>はこことルツ記 3 : 15 だけに用いられる。たくさん的大麦を入れても破れないだけの丈夫で広い布であったことがわかる。<財布>は、かなり大きい袋であった(列 5 : 23)。

23 節 手鏡、亜麻布の着物、ターバン、かぶり物を除かれる。

<手鏡>は、ここと 8 : 1(板)だけに用いられる。昔の鏡は、薄い金属板をみがき上げたも

ので、普通円形で、手がついていた。70人訳では「薄織りのドレス」。それは、語源が「裸にする」なので、「透けて裸の見えるような薄いドレス」と解釈したのである。このほうが、22,23節全体を衣料製品で統一する意味もある。<ターバン>は、男のもの(ヨブ29:14「かぶり物」、ゼカ3:5)だけでなく、女も用いた。<かぶり物>は、薄く広げられる上等のドレスである。ここと雅歌5:7にのみ用いられる。

以上、18-23節に21の装身具がリスト・アップされているが、そのうちアクセサリーが12、衣料製品が少なくとも8つある。これらすべてのものを一度に着けたわけではない。ここには、必需品や下着類はなく、いずれも女の虚栄を誇示するものばかりである。

24節 こうして、良いかおりは腐ったにおいとなり、
帯は荒なわ、
結い上げた髪ははげ頭、
晴れ着は荒布の腰巻きとなる。
その美しさは焼け傷となる。

17節の主題が繰り返される。原文では、前置詞 \square タハス(の代わりに)が5つきれいに並べられ、虚栄の対象が辱めと荒廃の対象に変わる逆転の運命が鋭く浮き彫りにされている。<焼け傷> \square キーは、女奴隷の額に押された焼印のこと。

25節 あなたの男たちは剣に倒れ、
あなたの勇士たちは戦いに倒れ、

26節 その門はみな、悲しみ嘆き、
シオンはさびれ果てて地に座す。

4章1節 その日、7人の女が
ひとりの男にすがりついて言う。
「私たちは自分たちのパンを食べ、
自分たちの着物を着ます。
私たちをあなたの名で呼ばれるようにし、
私たちへのそしりを除いてください。」

主のさばきは、外国の軍隊の侵略により、<男たち>が<戦いに倒れ>、エルサレムが荒れすたれることによって頂点に達する。エルサレムの<門>は、人々の集まる所であったが、もはや出入りする人はなく、門自体が空虚さを<嘆く>。この預言は、やがて150年後に成就した(哀2:8-10)。

<その日>、男の数があまりに少ないので、<7人の女がひとりの男にすがりつく>(4:1)。旧約時代の女にとっては、結婚できないことと子供のいないことは決定的な恥辱であった(創

30 : 23、士 11 : 37-40、ルツ 1 : 11-13、サム 1 : 11、イザ 54 : 4 等)。7人の女がひとりの男にすがりつくことも、女が言い寄ることもアブノーマルであるが、その上、出エジプト記 21 : 10 にあるような夫の妻に対する 3 条件のうち、食べ物と着物を辞退しているところに、事態の異常さがうかがわれる。<私たちをあなたの名で呼ばれるようにし>の前には、ラク(ただ)ということばがあり、女たちの願いの切実さを表している。女の虚栄へのさばきは、このような危機的状況によってクライマックスに達した。